マイ フェイバリット ライフ in 美幌町

ぼちぼち農場　荒木千夏
（あらき　ちなつ）

・昭和50年生まれ　大阪府大阪市出身
・2005年に脱サラし大阪から北海道へ移住し農業研修を経て2009年、美幌町で新規就農
・大阪時代からの友人・川野美香さんとともに・レタス・ブロッコリー・グリーンアスパラ・塩トマトなどの施設栽培を含め約8ha耕作
・趣味は、読書と美術館めぐりと37歳からはじめたピアノ
・平成27年度新規就農優良農業経営者優秀賞　受賞

納品書や領収書に「平成二八年」と間違わず書くことに慣れてきたのですが、気付けば一年の半分を折り返していて改めて時間が過ぎるのが早いなと感じています。

今年の美幌町の春は、干ばつ気味で風が強く農場でも強風で農業資材が飛ばされたりと風に翻弄された春でした。

五月中旬から六月上旬にかけてハウス内への定植作業が慌しく始まりあっという間に「essay」の締め切り日。

頭の中にあるネタをゴソゴソと探して引っ張りだしてきたエッセーを読んで頂きクスリと笑ってもらえたら嬉しいです。

709

美幌町で研修する前に十勝の鹿追町で農業実習をしていた。

春から秋にかけ畑作農家さんで、秋から冬にかけ牛屋さんで実習をした。

私が実習に行っていた牛屋さんでは、朝夕二回約一〇〇頭の牛の搾乳とそれ以外にも糞だしや寝床の掃除も行っていた。

それまで牛に接する機会もなくあれほど大きな動物を近くで見たり触ったりする機会もなかったので、正直恐怖心でいっぱいだった。

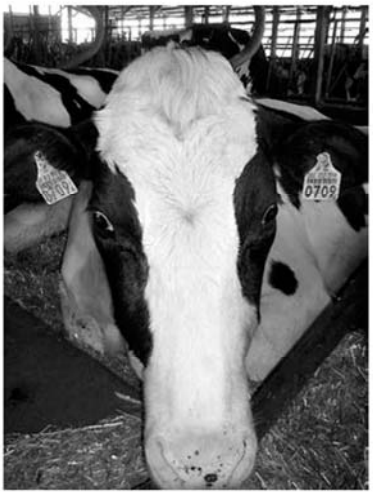
大きくて恐ろしいなと思いながら作業をしていると相手にも伝わるようで牛たちからかなりなめられた。糞付きの尻尾で顔を叩かれたり、わざわざ近づいてきて鼻水を飛ばされたり、寄ってたかって鼻先で押されたりと酷い目にあった。

毎日、作業しているなかで私と牛たちとの関係はいいものではなく、怖がっている私を牛が面白がって追いかけるという最悪の状況が続いた。

そんなとき事件が起こった。

搾乳待ちの牛数頭が作業をしていた私を取り囲み興奮し出したのだ。最悪だ、絶対怪我すると思ったそのとき、一頭の牛がのそりのそりと取り囲んでいた牛たちの向こう側から私の前に出てきて盾のようになってくれた。

偶然、助けてくれたみたいになったんだと思い、でも有難かったので耳標を確認すると「709」と書かれていた。その日以降、709は作業している私の傍につかず離れずいるようになり、搾乳待ちの牛がラスト数頭になる頃に709は搾乳を済ませ寝床に帰っていくようになった。



不思議だなと思いながらも私は709とても仲良くなり仕事が終わると709の寝床に行き挨拶をして帰るようになった。

それから、牛屋さんでの最後の実習日、いつものように作業をしていたら、いつも搾乳の順番が最後の方だった709がその日に限って先頭きってさっさと搾乳を終わらせ寝床に帰ってしまった。

私もそれを見ていた実習先の農家さんも驚いた。そして、その日の作業が全て終わったとき、農家さんが「搾乳の順番って習慣になっているからあんなことしないと思うんだけど、709は何かわかってたのかな」と言われ、きっともう私がここに来ないことをわかってたんだと思い涙が溢れた。

● 光と影

印象派を代表する画家クロード・モネ。日本人でモネが好きな人は多い。

例外なく私もモネの作品は好きだ。特に〝ロンドン国会議事堂、霧の中に差す陽光〟は何とも言えない感傷的な気分にさせられ、はじめて本物を見たときにはその場から動けなくなるくらいその絵に引き込まれた。

光と影を使い雰囲気を表現するなんて凄い絵だ。写真でも光と影を絶妙にとらえたものは美しいしこれは絵や写真に限ったことではないと思う。

人でも、裏にある努力だったり苦労だったりがあるからこそ、ひかり輝いて見え心を動かされる。影なくして光は存在しないのだ。

小学生の頃、絵を描くことが大好きだったので、近所の絵画教室に通っていたことがあった。そして、小学校の裏庭にあるヘチマを描いた絵がたまたま何かの賞をもらい展覧会に出品されることになった。

学校の教室で放課後一人残り、出品するから絵に手直しをしましょうと担任の先生に言われた。

目の前にヘチマはなく、見えるのは大

きな黒板とずらりと並んだ机と誰も座っていない椅子だった。

「あの時描いたヘチマはないのにどうやって手直しするの？」幼いながらに疑問を持ちながら苦戦し自分なりの着地点を見出せないまま先生に言われたとおり手直しをした。

それから、中学・高校と絵を描くことから離れてしまい大学に入ったときにもう一度描いてみようかと思い絵画教室に通いだした。ところが、デッサンで私は影を思うように表現することができずに挫折し絵を描くことをしなくなった。

今はもっと描けなくなっていると思うけど、いつか美しい影をとらえてみたい。

● 相　性

好きだからこそ距離感がつかめない。執拗にかまってしまう。その結果、嫌がられる。でも、気になって毎朝声をかけてまた、かまう。

嫌われたくないと思い焦って空回り。もういらないと言ってるのに、心配して与えてしまう。何が駄目だったのかと考えてまた近づいてじっくり覗き込む。

とうとう嫌われたと思って距離を置き、もう見ないようにしていたら気付くとそこには元気だった頃の姿はない。

観葉植物との距離感というか手入れの仕方が全くつかめない。

作物の管理はできるのに、どうしてなのかしらと不思議で仕方がない。

お店の人にきちんと管理の仕方を聞いてきて忠実に守っている。今年に入って二人に嫌われてしまった。いや正確にいうと観葉植物が二つ枯れた。自宅に空いた鉢が二個並んでいるのを見ると切なくなる。

でも、次こそはとまた最近、物色し始めているけど、なんだか可愛そうなことしているな…。

● 天気予報

大阪で勤めていた頃、納期が迫ってくると休日なしで毎日終電で帰るという日々が続いた時期がよくある。

一日中パソコンの前で仕事をし、昼なのか夜なのかもわからない。今日が寒いのか暑いのか、雨が降っているのか風が強いのかなんかも関係なく仕事をしていた。そういった情報が全く必要のない仕事だった。

大阪の夏は最高気温がどれくらい上がるのかも興味なかったし、ましてや水道凍結の心配が一切ない大阪で冬の最低気温がどれくらい下がるのかも知らない。

今は、毎日天気予報を確認している。一日四、五回は確認する。そして、風向きも気にして仕事をする。とりわけ雨の予報は何時から何ミリ降るのかを確認し、空を見上げて雲の動きも見る。

時折、鳥の鳴き声に耳をかたむけ、カッコーが鳴けば傍にいる人に「豆を蒔く時期だね」と声をかけてみるけど、これは六月の定番セリフ。

集める情報の種類が全く変わったけど、共通していえることはインターネットによる情報収集だ。畑に居てもスマホをサッと出してインターネットに接続すれ

ばすぐに知りたい情報が手に入る。インターネットで表示される画面を見ていると一〇年以上前に居た職場のあの雰囲気を思い出し今でも誰かがシステム開発をしていて天気なんか関係なく納期を気にして毎日頑張っているんだろうなと思う。そして、その誰かはまさかこんなに天気を気にして仕事をしている人がここにいるなんて知らないんだろう。

● 尊敬する人

尊敬している人がいる。

もう亡くなっているが、アップル社を設立したスティーブ・ジョブズさん。ジョブズさんが生前、スタンフォード大学の卒業式でスピーチをしたその内容にとても感銘を受けた。

『仕事は人生の一大事です。やりがいを感じることができるただ一つの方法は、すばらしい仕事だと心底思えることをやることです。そして偉大なことをやり抜くただ一つの道は、仕事を愛することでしょう。』

『あなた方の時間は限られています。だから、本意でない人生を生きて時間を無駄にしないでください。ドグマにとらわれてはいけない。それは他人の考えに従って生きることと同じです。

他人の考えに溺れるあまり、あなた方の内なる声がかき消されないように。そして何より大事なのは、自分の心と直感に従う勇気を持つことです。

あなた方の心や直感は、自分が本当は何をしたいのかもう知っているはず。ほかのことは二の次で構わないのです。』

そして、スピーチの最後に『Stay Hungry. Stay Foolish.』と締めくくられている。

私は、この仕事が大好きだ。そして、この農場も大好きだ。

自分の居場所はここなんだと思い仕事をしている。この農場で作った野菜を食べた人が笑顔になってくれたら何ものにも代えがたい喜びになり、心底素晴らしい仕事をしているんだと思える。

『ハングリーであれ。愚か者であれ。』

私は、いつも昼前にはお腹グーグー鳴らしてるし、あまりにつまらない冗談を言って周りの人達に失笑されるという愚かなこともしている。

ジョブズさんに突っ込まれそうだ。

「君、そういう意味じゃないのよ…」